

浅川扇状地遺跡群

桐原牧野遺跡（2）・桐原要害（高野氏館跡）

—桐原二丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年12月

長野市教育委員会

浅川扇状地遺跡群

桐原牧野遺跡（2）・桐原要害（高野氏館跡）

—桐原二丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年12月

長野市教育委員会

序

埋蔵文化財は、地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにするうえで欠くことのできない貴重な財産であります。

近年、人々は社会の変化を受けて環境や景観に配慮した生活空間を願う求め、地域の自然・歴史・文化を具体的に示す各種の文化財への関心・期待は確実に高まっています。

ここに長野市の埋蔵文化財第145集として刊行いたします本書には、桐原二丁目分譲地造成工事に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査によって得られた成果を、浅川扇状地遺跡群に属する「桐原牧野遺跡(2)・桐原要害(高野氏館跡)」として詳しくまとめてあります。発掘調査では、古墳時代前期の土坑、古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡、中世の井戸跡・土坑・溝跡が検出されています。この成果が地域の歴史解明、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力をいただいた事業者や地域の皆様、測量・写真撮影に関わられた方、掘削用重機等の現物提供をいただいた関係者、また、発掘作業に携わっていただいた皆様に感謝申し上げます。







2016(平成28)年12月

長野市教育委員会

教育長 近藤 守

例 言

- 1 本書は、長電建設株式会社による分譲地造成工事に伴い、記録保存を目的として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 埋蔵文化財発掘調査の実施に関しては、長電建設株式会社と長野市との間で協定及び委託契約を締結し、平成 27 年度に発掘作業、平成 28 年度に整理及び報告書作成を実施したものであり、業務は長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が履行した。
- 3 発掘調査地籍は、長野市桐原二丁目 940 番地 4 外で、起因となった開発事業面積 4,769.64㎡全域を保護対象面積とし、そのうち 510㎡を発掘調査対象面積として調査を実施し、実質調査面積は 603㎡である。
- 4 測量業務は株式会社写真測図研究所に委託した。本書の図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系 2011）と、日本水準原点の標高に基づく。
- 5 本書に実測図を掲載した遺物は掲載番号を通し番号とした。
- 6 本書の編集執筆は飯島哲也の指導の下、第Ⅱ章を田中暁穂・鈴木時夫、その他を田中が担当した。遺構図整理・遺物整理・表作成等は田中と向山純子で行った。
- 7 本書図中に用いたトーンは以下の通りである。

	黒色		赤彩		炭		被熱痕		須臾器		灰軸
---	----	---	----	---	---	---	-----	---	-----	---	----
- 8 発掘調査で得られた資料は長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが保管している。なお遺跡略号は「AKY」としている。

目次

序・例言・目次	
第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査体制	
第3節 調査日誌抄	
第II章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第III章 調査成果	7
第1節 調査概要	
第2節 遺構	
第3節 遺物	
第4節 まとめ	11
報告書抄録・奥付	

挿図目次

図1 遺跡の位置	4	図3 調査成果に基づく中世館跡の堀跡想定図	6
図2 周辺の遺跡と今回調査地点	5	図4 基本層序	7

表目次

表1 遺構観察表	9	表3 掲載外遺物重量表	17
表2 遺物観察表	13		

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

調査地は、蘆駒奉納の行事で有名な桐原牧社の東側に位置し、昭和35年（1960）に北信濃地域の有力蔵元6軒が集まって設立された雲山銘醸株式会社の桐原本社工場の敷地であった。閑静な住宅密集地の中で長らく酒造場が営まれていた場所であるが、都市計画道路高田若槻線が敷地の一部を通過することから、工場は閉鎖・解体され空き地となっていた。

この閑静な住宅街の一角に、開発の話が浮上したのは平成26年7月14日に遡る。まだ土地売買前の事前調査段階とのことであったが、今回の開発事業者とは別の業者から長野市教育委員埋蔵文化財センター（以下、当センター）宛てに、埋蔵文化財の取り扱いに関するファックス照会がなされた。当該地は桐原要害（高野氏館跡）として埋蔵文化財包蔵地に登録されており、また西側隣接地においては既に都市計画道路高田若槻線の建設工事に先立つ発掘調査が財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文）によって実施されていることから、埋蔵文化財包蔵の可能性はほぼ確実と容易に推測できた。よって、工事着手前に文化財保護法（以下、法）第93条の規定に基づく届出が必要であることと、早めの協議が重要であることを回答している。

その後、開発事業面積約4.175㎡、宅地18区画分の造成計画が浮上したのは平成27年1月13日である。開発事業者からの依頼を受けたコンサルティング会社の担当者が当センターに来所し、同日付で法第93条第1項による届出が市教委宛てに提出され、併せて埋蔵文化財の取り扱いに関する照会がなされ、同時に具体的な造成計画の設計変更にあたり埋蔵文化財の包蔵状況に配慮したいとの申し出があった。

同月22日付26埋第2-157号にて、保護措置として発掘調査の実施が不可欠であると、法第93条第2項による指示を行った。それを受けて改めて設計変更された造成計画によると、宅地部分においては想定される遺物包含層の上面から30cmの保護層を確保した上で、そのレベルに住宅等の基礎掘削が達しない程度の盛土を施す仕様となっている。なお、遺物包含層の推定に関しては、隣接地にて発掘調査を実施している県埋文のデータを援用させていただき、隣接する清林寺における当センターの立会調査の土層データも参考とした。

同年2月25日に、開発事業者との保護協議を行い、開発区域全体を保護対象とし、発掘調査による記録保存は永久構築物に該当する開発道路部分約510㎡とし、保護層が確保される宅地部分他については、埋蔵文化財への影響が懸念される範囲を工事立会とし、影響がない場合を現状保存の措置とすることを確認した。これらの保護措置について定めた「埋蔵文化財の保護に関する協定書」は、開発事業者と市教育長との間で平成27年3月24日付で締結した。協定書に添付した発掘調査実施計画書には、現地における発掘調査を市教育委員会が平成27年度に実施し、整理作業を翌年度に実施して報告書を刊行するというスケジュールが計画されている。その後、4月6日付で開発事業者と長野市長との間で平成27年度分の「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

現地における発掘作業は4月6日から着手し、6月2日までの58日間実施している。翌平成28年1月20日付で平成27年度分の委託契約について委託料の減額に関する変更協議を行い、同月27日付で変更委託契約を締結した。契約条項第8条に基づき、同年3月15日付で事業者宛に実績報告書を提出し、平成27年度分の事業を終了した。平成28年度分の事業（整理作業）については、協定書に基づき平成28年4月12日付で委託契約を締結し、発掘調査報告書として本書を刊行したところで、平成28年度分の委託業務を終了した。

第2節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直営事業として当センターが実施し、その組織は以下のとおりである。なお発掘調査に使用する大型重機・機材等は、事業者（調査依頼者）から提供を受けた。

発掘調査・整理調査（平成27年度）

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守
調査機関	文化財課	課長	青木和明
	埋蔵文化財センター	所長	小山敏夫
	庶務担当	係長	竹下今朝光
		事務職員	大竹千春
	調査担当	係長	飯島哲也（調査担当者） 風間栄一
		主事	小林和子
		専門員	柳生俊樹 高田亜紀子 田中暁穂（主任調査員） 清水竜太 遠藤恵実子 日下恵一（調査員） 篠井ちひろ
発掘作業員	荒井稔 伊藤咲子 植木義則 上原律江 江守久仁子 江守重七郎 岡沢貴子 岡宮純子 北村まどか 後藤大地 駒村文男 塩入洋子 杉本千代 田代弥生 月岡純一 藤澤洋子 峯村茂治 宮尾弘子 宮川かおる 村田岳仁 横田与志子 渡辺由美		
遺構測量委託	株式会社 写真測図研究所		

整理調査（平成28年度）

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守
調査機関	文化財課	課長	青木和明
	埋蔵文化財センター	所長	森山正美
		課長補佐	飯島哲也（調査担当者）
	庶務担当	係長	竹下今朝光
		事務職員	宮崎千鶴子
	調査担当	係長	風間栄一
		主事	小林和子
		研究員	鈴木時夫 高津希望 田中暁穂（主任調査員） 遠藤恵実子 日下恵一 篠井ちひろ 清水竜太
調査員	青木善子 鳥羽徳子 向山純子 武藤信子		
整理作業員	清水さゆり 関崎文子 西尾千枝 待井かおる 三好明子		

発掘調査事業の委託者である長電建設株式会社におかれては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解に基づき、円滑に調査事業を実施できるよう多大なるご配慮を賜った。調査にご協力頂いた各位に記して厚く御礼申し上げます。

第3節 調査日誌抄

- 4月 6日 重機による表土除去。N区西側より開始。
7日 S区1次面表土掘削開始。
8日 N区東端に南北方向のトレンチ設定、掘削。
土層堆積状況を精査。
9日 機材搬入。
10日 N区2次面遺構精査開始。
16日 N区2次面遺構調査開始。
21日 S区精査開始。
23日 N区2次面全景撮影・測量。
30日 S区1次面全景撮影・測量。
5月 7日 S区包含層掘削・遺構精査開始。
13日 S区東端の遺構確認面確定のため、トレンチ
を設定、掘削。
30日 S区2次面空中写真撮影。
6月 1日 S区2次面測量。
2号井戸跡を重機により半截、土層断面の撮
影・図化作業を行う。
2日 器材撤収して調査を終了。



表土除去



作業風景



調査参加者の皆さん

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

浅川扇状地遺跡群は長野市街地北東部、浅川により形成された扇状地上に広がる。浅川は千曲川の支流で飯綱山を水源とし、北西から南東方向に流下する。古来「浅河原」と称された所謂水無川で、水不足と洪水を繰り返してきた。このため水源には近世に7つの池が築かれ、浅川流域には用水確保のために堰や溜池が設けられ、遺跡のある桐原・吉田地区にも、かつて9ヶ所の溜池が存在した。現在でも辰巳池・桐原弁天池・中越池が残っている。

調査地は長野電鉄桐原駅の東南約200mに位置し、西に桐原神社、南に近世から続く清林寺がある。近代には果樹・畑地として利用されていたが、昭和35年(1960)に雲山銘醸株式会社という酒造会社が設立された。その後平成20年(2008)に同社が移転して以降空地となっていた。大正15年測量の地形図によれば、調査地の周囲に1町四方の区画を推測させる道路や境界が廻り、南東隅は欠角となっている(図3)。その区画内は地形の傾斜が比較的緩やかであるが、区画の東-南東-南辺には急傾斜が観察される。また区画内南東に、比高差約1mの高台が見られ、その北から東にかけて、弧状に溝のような落込みが確認される。現況は酒造会社が転出後に更地となっており、全体的に平坦な地形ではあるが、東に向かうに従い道路との比高差が生じて、高くなっている。なお大正15年の地形図に高台が所在した位置に、既にその痕跡は残存していなかった。



図1 遺跡の位置 (S = 1 : 50,000)

①善光寺門前町跡 ②西町遺跡 ③中御所居館跡・御所遺跡

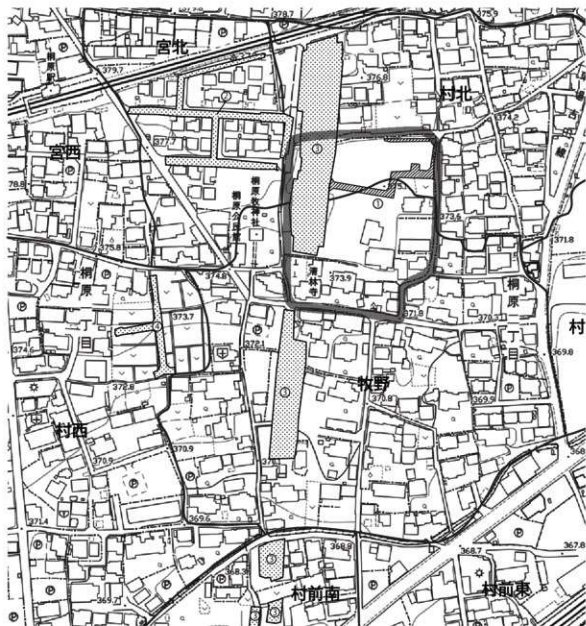


図2 周辺の遺跡と今回調査地点 (S = 1 : 2500, 平成 24 年修正都市計画図に加筆)

- ①本調査範囲 (桐原要害) ②桐原宮北遺跡 ③県道高田若槻線建設地区 ④桐原牧野遺跡

第2節 歴史的環境

調査地は浅川扇状地遺跡群に属し、桐原要害 (高野氏館跡) という中世城館跡に比定され、調査地の周辺には弥生時代～中世にかけての遺跡が密集している。西接する県道高田若槻線の建設に伴う、累埋文の調査は平成 23 年度から継続されているが、弥生後期から近世の遺跡が確認され、中世館跡のもと想定される土橋を伴う堀跡が検出されたことは本調査と関連が深い。堀跡は方形に廻ると推測されるが、調査では西辺北部から北辺西部の部分が確認されている (図3)。幅約 3m、深さ約 1.5m で、幅約 2m の土橋は想定される館跡の西辺部中央に位置する。館内には井戸跡も確認され、これらの遺構は遺物の年代より 13 世紀後半とされている。県調査区の北西で、平成 22 年度に当センターが行った桐原宮北遺跡の調査でも、同様に弥生後期から中世にかけての遺跡

が確認されており、方形周溝墓や住居跡などが検出された。また県調査区で検出された堀跡の北西角が検出されている。調査地南西約200 mに位置する桐原牧野遺跡の調査は平成26年度に行われているが、古墳前期から平安期の遺構や遺物が確認された。この際に所在地の字名である牧野に従い、桐原牧野遺跡の範囲が設定された。調査地は厳密には村北・牧野のどちらの字にも掛かっているが、桐原牧野遺跡と連続する遺跡と判断されるため、中世以前の遺跡については桐原牧野遺跡とした。調査地の東方には東部中学校遺跡が所在するが、地形的には調査地と谷筋を挟んでおり、関係が希薄と推定されるが、未調査のため詳細は不明である。これらの桐原地区に分布する遺跡は、調査地周辺に広がる平坦な地形を選択して立地していると考えられる。遺跡の所在する桐原は、古代の行政区分では水

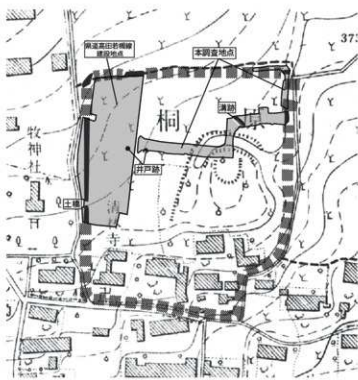


図3 調査成果に基づく中世館跡の堀跡想定図 (S = 1 : 2,000
大正15年測量旧地形図・平成24年修正都市計画図を基に作成)

内郡芋井郷に比定されている。また現存する「駒沢」「牧野」という字名を根拠として、古代桐原牧の推定地の一つに挙げられてきた。桐原牧は平安時代の儀式書である「北山抄」応和元年(961)11月4日条に「召桐原駒廿疋(略)」と見え、平安末期から中世にかけての朝廷の駒迎えの歌に「桐原」が読み込まれる著名な牧の一つであった。しかし現在では桐原牧は松本市に所在することがわかっているが、周辺には中世吉田牧が比定されており、「吾妻鏡」文治2年(1186)3月12日条に左馬寮に所属する牧として記載され、一帯は牧として適した地域であったと思われる。中世の桐原については資料が少ないが、鎌倉時代には古井(小井)郷に属していたとされている。古井郷には北条得宗被官の所領が散在していたが、桐原がどのような状況であったかは不明である。明徳3年(1392)「高梨薩摩守朝高井一族以下被付給人所々注文」には善光寺平の有力国人である高梨氏の所領として「小井郷」が挙げられ、この時期までに高梨氏の所領となっていたことが窺える。この他、長沼・赤沼を本拠とする島津一門、惟宗忠国が文明3年(1471)に桐原を知行したが、長くは続かなかつたとされる。応永11年(1404)12月「市河氏貞軍忠状」に「同十一年九月高梨左馬助依背上意、為御退治、(略)桐原・若槻・下芋河之要害貞落」とあり、高梨氏は幕府の上意に背いたために信濃国代官細川滋忠に攻められ、桐原にある要害も攻め落とされたと記される。中世後期には長野市域でも郷村を基盤とする小規模な領主があり、荘園や高梨氏のような有力国人層の領地を運営していたが、永享12年(1440)『結城陣番帳』には信濃国の国人らとともに桐原氏が見え、その記載順より桐原村に基盤をもつ小規模領主であった可能性が指摘されている。なお桐原村については「諏訪御符礼之古書」応仁2年(1468)条に近隣の村である宇岐・小鹿野・吉田・長島とともに記されている。

地元に伝わる文政8年(1825)桐原村絵図には「高野刑部少輔屋敷跡当時畑」と記載されている。『長野県町村誌』においても「高野氏古城址」とし、「本村中の方桐原組字牧野耕地にあり、郭址回字形をなす。」と記されるが、城主高野氏や築城年代などについては不詳としている。現在長野市教育委員会ではこれらの伝承に依拠して、調査地を桐原要害(高野氏館跡)として遺跡に登録している。

第III章 調査成果

第1節 調査概要

調査範囲は宅地造成地内の道路部分であるため、確認面での幅は3m前後で鍵状に屈曲している。調査区は北東のL字状部分をN区、南をS区に分割して調査を行い、報文においても呼称として使用した。当初N区は立会調査の予定であったが、重機による掘削を行ったところ遺構が検出されたため、本調査を行うこととした。調査区の西には現在建設中の県道高田若槻線が接しており、中世前期の土橋を伴う溝跡が検出され、井戸跡・ピットなども確認されている。本調査区の西部においては、中世の井戸である2号井戸や土坑などが検出されており、中世の館跡に伴う遺構と想定され、県調査区と一連の遺構と考えられる。

N区では竪穴住居と想定される遺構を検出したが、調査区幅が約1mと狭いため、全容を解明することが出来なかった。S区東端は急傾斜を伴う落込みが確認され、杭列を伴う南北方向の溝状遺構が存在すると考えられる。S区中央は以前操業していた酒造会社建物により攪乱が深く入り、遺構が確認されなかった。旧地形と調査地の位置関係によれば(図3)、本来溝状に落ち込んでいた部分に酒造会社による攪乱が重複している可能性もあるだろう。基本層序は図4に示した通りで、遺構確認面を2面設定した。基本的には北西-南東に傾斜する扇状地形を反映した堆積となっているが、中世段階に堀などの造作が行われ、更に近現代の段階で削平・盛土による整地が行われたと推測される。このため境界付近は敷地内に対し低くなっており、敷地内についても西半は外周道路とほぼ同じ高度であるが、東半は盛土層が厚くなり、次第に道路よりも高くなる地形となっている。このため敷地境界に当たる調査区東端2次面は、現道からの深度は50cm前後であるのに対し、敷地からの深度は1.3m前後にも達していた。

出土遺物の年代に基づき、1次面は中世以降、2次面は古墳時代～平安時代と判断した。しかし西接する県埋文調査区と同様、中世の井戸跡・堀跡など深度が深い遺構は2次面でも検出されている。本調査における中世の遺構・遺物の寡少さは、本来中世面が存在したものの、後世の攪乱によりかなりの部分が削平を受けている可能

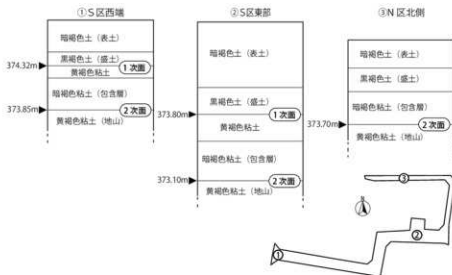


図4 基本層序 (S = 1 : 40)

性を示唆している。今回の調査では攪乱により削平された部分が多かったが、遺構の分布状況を鑑みれば、その部分にも遺構が存在した可能性は高い。

遺構の記録保存については、遺構実測図作成に係る測量を株式会社写真測図研究所に業務委託し、専門員が現地で作図を行った。遺構写真撮影は35mm一眼レフカメラ、モノクロネガ・リバーサルフィルムを用い、補助として一眼レフデジタルカメラを用いた。

第2節 遺構

(1) 1次面

1次面はS区にのみ検出され、畑跡・土坑・ピットがS区の東西端に散在している。S区中央は広範に攪乱を受けており、遺構を確認することが出来なかった。各遺構からは土師器・黒色土器が出土しているが、いずれも年代が不明である。検出面の出土遺物も弥生～近代まで多様な時代のものが見られ、年代の確定が困難であるが、概ね中世以降と考えている。N区は敷地縁辺に当たると、表土面のレベルが低く、1次面が削平されていた。1号溝は本来は更に深い遺構であったと考えられ、検出されたのは底面付近のみと見られる。

(2) 2次面

N区は調査区幅が狭小なため、検出した遺構の性格が不明なものが多い。竪穴住居跡が3軒であるが、当初1号住居とした遺構については、遺構内の掘り込みが住居とは判断できない状況であったため、3号不明遺構に変更した。4号不明遺構は、2号住居の変更である。遺構北壁直下に周溝状の溝が伴い、遺構プランが方形の可能性が考えられたが、出土遺物の年代が古墳前期を主体とするため、遺構の性格を不明とした。

S区は1次面同様、中央が攪乱されており、遺構は調査区の東西に分散されている。中世の遺構は西に集中しており、2号井戸からは土器皿が出土し、5点を掲載した。その他30号土坑周辺に検出された土坑やピットは柱穴と想定されるものがあつたが、掘立柱建物として組むことは出来なかった。調査区東端は急斜面になっており、杭列と考えられるピットがその上端に並列している。館跡を圍繞する堀跡の想定ラインに重複するため、その一部とみられ、N区の1号溝へと繋がると考えられる。8号溝は北西～南東に走行すると推測されるが、調査区壁において溝と判断できる断面と堆積を呈していたものの、東の立ち上がりが確認されたのみで、西部は攪乱により削平されていた。しかし、大正15年測量の地形図と照合すると、城館南東にある高台の北を弧状に廻る溝状の落込みと位置が合致する(図3)。

竪穴住居は全体的に残存率が低く、深度が浅い。中でも12号住居は周囲の遺構との重複が激しくプランが不明確である。住居北壁に遺物集中を伴う落込みが確認されたが、被熱面などが見られず、カマドと確定することはできなかった。カマドが明確に検出されたのは7号住居のみで、16号住居は礎の検出された位置と残存状況よりカマドと判断した。8号土坑は長方形の土坑で、長軸壁際に細い溝が検出されたため木棺墓と推測される。また8号土坑の北東・南西に焼土範囲が確認されたが、性格は不明である。8号土坑の周囲には溝が約3.8m四方に廻り、南東隅は溝が切れている。溝と重複する23号土坑から出土したハケ調整くの字裏は、屋代編年古墳2・3期の所産であり、古墳前期の遺構と考えられる。このため8号土坑と周溝の年代はそれ以前の可能性が指摘でき、時期的にも方形周溝墓と推測される。

(単位 cm)

図面	遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	時期	備考
N.2	SB5	(301.3)	(107.3)	15.0	(方形)	—	—	—
N.2	SB6	(309.4)	(90.3)	18.0	(方形)	—	—	SB6と重複
N.2	SB7	399.1	(120.4)	24.0	(方形)	—	—	SB5と重複 >SB15
N.2	SB8	—	—	—	—	—	—	—
N.2	SB12	345.6	(187.8)	18.0	(方形)	—	—	—
N.2	SB14	(179.6)	(93.2)	36.0	(方形)	—	—	—
N.2	SB15	(280.5)	(260.8)	2.4	(方形)	—	—	—
N.2	SB16	(280.1)	(163.9)	24.0	(方形)	—	—	—
N.2	SB17(SB13)	(240.7)	(208.3)	15.0	(方形)	—	—	—
N.2	SK1	92.0	60.0	27.4	楕円形	台形状	—	<SB12,SK28
N.2	SK2	86.0	84.0	30.5	円形	台形状	—	SK3と重複
N.2	SK3	92.0	80.0	33.0	円形	平円状	—	—
N.2	SK4	96.0	(40.0)	12.7	楕円形	皿状	—	<溝瓦
N.1	SK5	(184.0)	72.0	10.4	楕円形	皿状	—	—
S.1	SK6	112.0	28.0	10.6	楕円形	台形状	—	—
S.2	SK8	244.0	94.0	10.4	—	楕円	—	—
S.2	SK9	76.0	40.0	24.8	—	階段状	—	—
S.2	SK10	140.0	104.0	60.3	楕円形	階段状	—	—
S.2	SK11	126.0	68.0	62.9	方形	台形状	—	—
S.2	SK12	88.0	64.0	45.2	楕円形	階段状	—	—
S.2	SK13	160.0	104.0	29.4	長方形	楕円	—	—
S.2	SK14	120.0	108.0	75.5	楕円形	階段状	—	—
S.2	SK16	124.0	94.0	71.1	長方形	楕円	—	—
S.2	SK17	110.0	(48.0)	32.6	円形	階段状	—	—
S.2	SK18	60.0	(28.0)	—	円形	—	—	—
S.2	SK19	112.0	50.0	13.4	楕円形	皿状	—	—
S.2	SK20	156.0	66.0	61.0	楕円形	階段状	—	—
S.2	SK21	92.0	76.0	11.0	方形	皿状	—	—
S.2	SK22-23	196.0	120.0	36.5	楕円形	階段状	—	—
S.2	SK24	64.0	60.0	7.8	円形	皿状	—	—
S.2	SK25	98.0	82.0	13.1	長方形	楕円	—	—
S.2	SK26	—	—	—	—	—	—	—
S.2	SK27	100.0	68.0	18.0	不整形	皿状	—	—
S.2	SK28(SB11)	(114.0)	106.0	28.9	不整形	台形状	—	—
S.2	SK29	102.0	76.0	40.0	長方形	V字状	—	—
S.2	SK30	272.0	198.0	64.7	不整形	階段状	—	—
N.2	P1	48.0	42.0	13.2	円形	平円状	—	—
N.2	P2	32.0	28.0	8.6	円形	平円状	—	—
N.2	P3	60.0	52.0	24.5	円形	台形状	—	—
N.2	P4	38.0	(24.0)	29.9	円形	U字状	—	—
N.2	P5	32.0	30.0	32.6	円形	東側階段状	—	—
N.2	P6	34.0	32.0	21.4	円形	北側階段状	—	—
N.2	P7	32.0	32.0	22.4	円形	U字状	—	—
N.2	P8	32.0	30.0	23.7	円形	V字状	—	—
N.2	P9	56.0	38.0	17.1	円形	台形状	—	—
N.2	P10	44.0	44.0	14.0	円形	皿状	—	—
N.2	P11	64.0	(20.0)	25.7	楕円形	台形状	—	—
N.2	P12	36.0	32.0	43.0	円形	平円状	—	—
S.1	P13	46.0	44.0	21.5	円形	平円状	—	—
S.1	P14	84.0	60.0	29.7	楕円形	台形状	—	—
S.1	P16	24.0	24.0	12.5	円形	平円状	—	—
S.1	P17	30.0	28.0	20.0	円形	平円状	—	—
S.1	P18	40.0	36.0	25.4	円形	階段状	—	—
S.1	P19	48.0	36.0	22.3	楕円形	平円状	—	—
S.1	P21	18.0	18.0	10.4	円形	平円状	—	—
S.1	P22	20.0	20.0	14.0	円形	U字状	—	—
S.1	P24	28.0	28.0	24.8	円形	平円状	—	—
S.2	P25	24.0	24.0	10.0	円形	平円状	—	—
S.2	P26	32.0	30.0	30.4	円形	U字状	—	—
S.2	P27	24.0	24.0	11.6	円形	皿状	—	—
S.2	P28	22.0	22.0	9.2	円形	皿状	—	—
S.2	P29	26.0	20.0	12.1	円形	平円状	—	—
S.2	P30	20.0	18.0	11.2	円形	平円状	—	—
S.2	P33	46.0	44.0	14.3	円形	平円状	—	—
S.2	P34	42.0	30.0	13.3	円形	皿状	—	—
S.2	P35	32.0	28.0	7.5	円形	皿状	—	—
S.2	P36	80.0	32.0	5.3	円形	南側階段状	—	—
S.2	P37	32.0	32.0	29.2	円形	U字状	—	—
S.2	P41	40.0	20.0	13.8	方形	台形状	—	—
S.2	P42	64.0	56.0	14.7	不整形	円形	—	—
S.2	P43	42.0	40.0	24.7	円形	平円状	—	—
S.2	P44	50.0	42.0	22.2	不整形	平円状	—	—
S.2	P45	76.0	(42.0)	17.7	円形	平円状	—	—
N.2	SD1	(248.0)	230.0	32.7	—	非標準中置方	—	—
S.2	SD3	(400.0)	48.0	11.8	直線状	台形状	—	—
S.2	SD4	428.0	60.0	12.8	直線状	台形状	—	—
S.2	SD5	220.0	60.0	12.8	不整形	皿状	—	—
S.2	SD6	408.0	46.0	7.0	直線状	皿状	—	—
S.2	SD7	360.0	68.0	33.0	—	皿状	—	—
S.2	SD8	(220.0)	—	—	—	—	—	—
S.2	SE2	196.0	(114.0)	(74.9)	円形	U字状	—	—
N.2	SK1	—	—	—	—	—	—	—
S.2	SK3(SB1)	192.0	100.0	3.2	不整形	皿状	—	—
N.2	SK4(SB2)	192.0	(120.0)	19.3	—	皿状	—	—
N.2	SK4(SB2)	(183.3)	(91.3)	30.0	—	—	—	—

表1 遺構観察表

第3節 遺物

土器については、古墳時代から中世に涉り、各時代の研究に依拠して記載した。古墳時代～古代については、屋代遺跡群（長野県埋文 2000）の編年を基準としたが、より長野市域の状況を捉えるため、松原遺跡（長野県埋文 1998）・榎田遺跡（長野県埋文 1999）・本村東沖遺跡（長野市教委 1993）など北信地域の代表的な遺跡の編年を参考とした。中世の陶磁器については、東濃型山茶碗は武部氏の論考（2006）を基に、『中世窯業の諸相』（全国シンポジウム 2005）、『愛知県史』（愛知県 2007）の編年を参考とした。珠洲系須恵器は吉岡氏の編年を用いた。

(1) 古墳時代

4号不明遺構出土の土台甕（61）は東海系の口縁S字状の甕である。共存している高杯（59・60）は松原遺跡で新出系とされる、開脚椀形であり、両者の編年の位置付けにより、松原様相1～3にあたり、古墳前期となる。3号土坑においてもS字状口縁の甕片が出土している。その他の古墳前期の遺物として、装飾器台と推測されるものが出土した（86）。身部下端と器受部のみの資料であるため、詳細は不明であるが、高杯状装飾器台とされるものと思われる。滝沢規明氏が分類した新潟県内の器台の中で「中鳥廻りタイプ」に形態が近い（滝沢 2005）。3号不明遺構出土の密底部片（58）は焼成前に底部を穿孔している。このような器種は古墳時代全般にわり見られるが、共存する土師器鉢（57）が器形が前期的な様相を有し、中伏遺跡14号溝387に近い。しかし刷毛調整の後に部分的なミガキを施す、中期的な特徴もみられる。また本村東沖3段階に同様資料が見受けられるため、屋代古墳4期（5世紀前半）の所産と考えられる。6号住居は土師器杯・甕が出土し、全体として屋代古墳6期項（5世紀末～6世紀初頭）と見られ、切合関係にある5号住居もそれに近い時期と考えられる。14号住居出土の内面黒色杯（28）は内斜口縁であり、26は須恵器模倣高杯である。これらの遺構の出土遺物は屋代古墳6・7期項（5世紀末～6世紀中頃）である。

15号住居の資料はそれよりも若干遅い時期で、有段口縁壺（32）の段が不明瞭になる新しい段階であり、ハケ調整くの字口縁壺（33,37）の胴部形態にもその特徴が表れている。11号住居出土須恵器杯蓋（22）は胎土や成整形の特徴よりTK208～23併行期で在地窯産と考えられる。

全体として屋代古墳6・7期（5世紀末葉～6世紀代）を主体としており、3号土坑・23号土坑・4号不明遺構のような古墳前期の遺物を若干含む。

(2) 古代

7号住居出土の土器はカマド出土遺物を除き、床面出土はほとんど見られない。須恵器高台杯（13）は屋代古代5・6期と若干古い、全体として屋代古代6・7期に属する。突帯付四耳壺（14）は頸部の切抜き径が大きいため、胴部の成形に風船技法が用いられたかどうかは不明である。8号住居はカマドのみを検出した遺構だが、出土した土師器甕（19,20）は胴部下半に平行叩きが施され、北陸の影響を見出せる。土師器杯・黒色土器杯を有するため、7号住居よりもやや新しく、屋代古代8・9期を中心とした時期である。16号住居は黒色土器杯・須恵器杯を主体とするため、屋代古代6・7期と考えられる。須恵器高台壺（43）は口縁部が残存しないが、短頸壺であると見られ、胴部に湿台痕が観察された。44は甕である。2号不明遺構から出土した須恵器杯（56）は屋代古代2期で7世紀末～8世紀前半と早いが、共存遺物は古墳～古代と幅広く、遺構の時期を特定することは出来ない。墨書土器（72）は欠損のため内容は不明、刻書土器（88）も釈文は「×」と推測されるが、小片であるため確定できない。

全体として一般的な集落の器種構成であり、近接する桐原宮北遺跡のような、稜碗・双耳杯・円面碗のような特殊遺物の出土は見られなかった。

(3) 中世

本遺跡で出土した土器皿はすべてロクロ成形で回転系切離しである。2号井戸出土の土器皿(50～54)は口縁が外傾するように成形するタイプであるが、8号溝・30号土坑出土のもの(55・67)は内湾して立ち上がる器形で相違する。胎質・成整形にも相違があり、前者は黄褐色で雲母や石英を含み、粘土巻上げ痕を残すものなど成整形が雑な傾向にある。後者は灰白色で精良、やや軟質で、丁寧な整形である。産地・年代などが異なる可能性があるが、両者とも器形は概ね14世紀代の範疇にある。

30号土坑出土の山茶碗(68)は口縁から斜格子状脚目が施され薄手である。精良で緻密な胎土は東濃型の特徴であり、脚目をもつものは白土原1～大畑大洞4窯式期(13世紀中葉～14世紀中葉)に「オロシ碗」として生産されていた器種であることが指摘されている(武部2006)。共伴する珠洲焼片口鉢(69)は口縁形態は吉岡編年Ⅲ・Ⅳ期(13世紀後半～14世紀中葉)で山茶碗とほぼ同時期であり、土器皿の年代とも整合する。未掲載であるが、この他に龍泉窯青磁碗の小片が共伴している。

オロシ碗の産地での生産比率は1%と希少で、北信においても管見の限り出土例がない。山茶碗自体も出土例が少なく、市内では善光寺門前町跡八幡原磯五郎大門町建設地点(長野市教委2008)・同竹風堂善光寺大門店地点(長野市教委2006、以下、竹風堂地点)・御所遺跡(長野市教委2014)などである。出土例の少なさは、山茶碗の生産が中世前期を主体とし、しかも東海地方を主要な分布範囲として、信濃国内にはあまり搬入されないことによる。また北信における鎌倉時代の遺跡数が僅少であることも理由の一つに挙げられよう。

隣接する泉理文の調査成果との比較検討が必要であるが、本調査で手づくね土器皿を伴っていない点を考慮すれば、出土遺物の年代により、本調査の中世遺構は13世紀中葉～14世紀代の年代観が与えられる。

第4節 まとめ

調査地周辺では既に数か所で調査が行われ、弥生後期～古代の集落の存在が指摘されている。隣接する泉理文の平成26年度調査では、1辺17.5mの方形周溝墓が検出され、弥生末期～古墳初頭の特異な二重口縁赤彩壺3点や北陸系の壺などが周溝から出土している(泉理文2014)。桐原宮北遺跡においても方形周溝墓2基、古墳後期の住居跡、平安期の住居跡8軒が検出された(長野市教委2012)。

本調査においては、古墳前期に住居以外の何らかの利用が想定され、明確に検出はされなかったが、8号土坑などが方形周溝墓であった可能性が推測される。古墳後期になると居住域が形成され、奈良時代には空白期があるが、平安時代(9世紀後半～10世紀中葉)に再び集落になると考えられ、桐原宮北遺跡とほぼ同時期に存在した集落であることがわかる。おそらくは桐原地区一帯に古墳時代前期から集落が形成され、古代を通じて集落が維持されていたと想定される。桐原地区には長期集落が継続するための基盤があり、谷筋を流れていたとされる河川や、地区の南を流れる鍾塚川による用水の確保、牧を運営することが可能な地形がそれにあたると思われる。さらに桐原宮北遺跡において、拠点集落や寺院・官衙周辺遺跡の指標とされている、稜碗・双耳杯・円面碗が出土していることは、桐原一帯に地域の中核となる施設や拠点の集落が存在したことを示唆している。

中世では、今回の調査で判明した遺構の存続時期は13世紀中葉～14世紀代で、従来の想定通りに方形に廻

る堀跡の一部が検出された。遺跡名が「桐原要害」として登録されているが、「要害」という語は本来地勢が険しく攻めにくい場所という意であり、転じて攻めにくい場所に築いた砦や防備を意味するようになった（『日本国語大辞典』）。吉井宏氏は要害の実態の変遷について、抽象性が高い意味であったものが、元寇を通じて急速に具体性が強まり、軍事的構築物自体を指すようになったとした（吉井2001）。さらに斎藤慎一氏は15世紀における東日本の城館について文書・日記類に現れる用語をまとめているが（斎藤2014）、その中で要害は主に15世紀中葉以降に見られ、15世紀初頭の用例は、応永16年（1409）9月7日「荘厳講記録」（『長瀬寺文書』）に記される美濃国「（中野川）要害」と、「市河氏貞軍忠状」に記される「桐原・若槻・下芋河之要害」のみである。以下、斎藤氏の論に依拠すれば、東日本における要害の恒常化が15世紀中葉とすれば、時代は下がるが康正元年（1455）「足利成氏書状」（『那須文書』37・39）はどちらの文書も足利成氏の書状であり、同じ月内に発給されているにもかかわらず、「茂木城」と「茂木要害」の表現が見られる。このことはこの文書において、「城」と「要害」の使用に差異がなく、言い換えの可能な語彙として使用されているとする。「市河氏貞軍忠状」の年代を重視するならば、その中に記された「要害」も、同一文書内にある「城」とは表現が区別されているものの、軍事拠点という漠然とした意味合いで用いられているのであり、恒常的かつ具体的な軍事施設としての要害を指すのではないと推定される。

本調査及び泉埋文調査区で検出された館跡に関わる遺構は、中世に始まる吉田牧、鎌倉後期の北条宗徳官による所領形成、その後の高梨氏による領地支配など、鎌倉期から南北朝期にかけての古井郷一帯の情勢変化の中で、桐原を勢力基盤とする支配層の成長とその館の成立を示唆している。

この時期の長野市内の中世遺跡を概観すれば（図1）、善光寺周辺では竹風堂地点・西町遺跡において手づく土器皿を伴う遺構が検出され、門前町の区画溝が検出されている（長野市教委1998・2006）。また竹風堂地点においては溝に伴う土橋も確認され、泉埋文調査区の様相とも類似する。従来から、竹風堂地点・西町遺跡は遺物の高い階層性により、何らかの政治的施設あるいは館跡と想定されている。未報告ではあるが、中御所に所在する御所遺跡も該期の遺跡が存在することは、遺跡及び周辺における数度の調査により明らかである。このように市内での鎌倉～南北朝期の遺跡は城館遺跡・都市遺跡に限定され、遺跡数も非常に少ない。

桐原地区に1町四方の堀を廻らした区画を持つ城館は現段階では他には存在せず、また本調査における中世遺物の年代は13世紀中葉～14世紀代に限定されている点でも、15世紀初めに「貞落」された桐原の要害であることは確実であろう。さらに長野市内における希少な鎌倉期～南北朝期の城館遺跡としても本遺跡は貴重な事例となった。今後は桐原地区の歴史を解明するために、地区内における調査成果を統合的に分析し、文献史料ともあわせて、研究を進めることが必要となるであろう。

表2 出土土器・陶器類群表(1)

群別/調査 No./区	面	出土位置	種別	器種	残存率	数量 (調査区別)	色調	胎土	技法	調査年代	備考		
1	N	2	S109出土	土器 高杯	1/2	120	109	90.00	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～1mm	輪削成形(赤褐色)内面赤褐色ミナ ノ子・器底ハタノ子	現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
2	N	2	S109出土	土器 杯	3/4	133	5.8	3.0	133.00	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
3	N	2	S109出土	土器 杯	1/3	182	1	(4.5)	182.00	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
4	N	2	S109出土	土器 杯	1/3	120	2.8	4.5	120.00	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
5	N	2	S109出土	土器 杯	1/3	128	6.4	3.9	128.00	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
6	S	2	S107出土	土器 杯	1/4	131	6.4	3.7	105.20	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
7	S	2	S107出土	土器 杯	1/3	128	6.2	3.9	57.80	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
8	S	2	S107出土	土器 杯	1/3	138	6.5	4.3	107.20	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
9	S	2	S107出土	土器 高台付片	一部欠損	—	9.1	—	132.00	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
10	S	2	S107出土	土器 片	一部欠損	127	6.0	3.0	170.30	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
11	S	2	S107出土	土器 片	一部欠損	180	7.6	6.4	261.80	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
12	S	2	S107出土	土器 片	1/6	172	—	(3.3)	70.20	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
13	S	2	S107出土	土器 片	1/4	133	9.1	4.0	42.70	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
14	S	2	S107出土	土器 片	1/2	241	—	(17.7)	204.70	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
15	S	2	S107出土	土器 片	1/2	238	—	(33.2)	94.40	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
16	S	2	S107出土	土器 片	1/3	132	5.5	3.6	83.00	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
17	S	2	S107出土	土器 片	1/2	134	6.2	3.5	111.40	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
18	S	2	S107出土	土器 片	1/2	350	—	(6.0)	100.03	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
19	S	2	S107出土	土器 片	1/2	234	—	(28.0)	903.70	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
20	S	2	S107出土	土器 片	1/2	244	9	30.2	656.90	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
21	S	2	S107出土	土器 片	1/2	119	4.7	3.9	67.67	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
22	S	2	S112出土	土器 高杯	1/2	120	11.5	4.2	83.70	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
23	S	2	S112出土	土器 高杯	1/2	128	—	(4.8)	74.10	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
24	S	2	S112出土	土器 片	1/2	100	—	(5.6)	37.43	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
25	S	2	S112出土	土器 片	1/2	146	—	(11.3)	204.90	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
26	S	2	S114出土	土器 高杯	1/5	15.8	13.0	3.3	42.02	赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
27	S	2	S114出土	土器 片	7/8	12.6	9	5.2	188.52	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
28	S	2	S114出土	土器 片	1/4	11.4	—	(5.5)	54.58	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
29	S	2	S114出土	土器 片	1/5	100	—	(5.0)	20.78	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性
30	S	2	S114出土	土器 片	1/3	138	—	(7.0)	122.07	内面に赤褐色外明し 内面に赤褐色	現代古式6.0C 赤土系赤土、口縁中～2mm	内面に赤褐色 現代古式6.0、7.5C末～ 6.5C	群性

出土土器・陶磁器類表(3)

発掘調査 No.区	出土位置	種類	器種	現存率	口径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	色調	胎土	技法	産出年代	備考
56 S 2	SK32	須弥器	高付鉢	2/3	13.2	9.0	4.3	14000	白濁中~2.5mm	口口風形外底面下部口ノズリ底面平均厚底口ノズリ高付取付	現代式(27C)底~8C前	
57 N 2	SK45B116-2	土師器	鉢	3/4	14.3	2.6	6.6	151.20	赤土赤黄粉~5mm	内径小径・体部ミガキ・内径ノズリ・ハ	現代式(4.5C)前	新出灰黒泥
58 N 2	SK45B116-1	土師器	磁器乳壺	底部1/1	—	4.9	15.0	145.00	赤土赤黄粉	内径ノズリハ・体ノズリ	古墳	焼成の穿孔
59 N 2	SK45B27	土師器	高杯	底部1/2	14.9	—	3.6	71.60	長石角砂赤土濁中~1	輪削底内ハ・外縁部直線・ケズリ		
60 N 2	SK45B28	土師器	高杯	底部1/3	—	13.0	4.0	80.00	内径ハ・外縁外に赤土赤黄粉・赤土濁中~1mm	内径ノズリハ・体ノズリ		
61 N 2	SK45B29	土師器	付付篋	口縁~底部1/3	14.2	6.9	16.2	177.90	内径外縁外に赤土赤黄粉・赤土濁中~1	輪削底内ハ・外縁外に赤土赤黄粉・赤土濁中~1	古墳前期2・3・5古墳前	東海系・瀬川口内山内郡那志中邑内宮又ス住
62 N 2	SK36-1	土師器	壺	口縁部1/1	15.3	—	118.5	818.70	赤土赤黄粉~2mm	輪削底内ハ・外縁外に赤土赤黄粉・赤土濁中~1	古墳前期	
63 N 2	SK36-2	土師器	壺	口縁部3/16	17.0	—	65.8	8.70	赤土赤黄粉・赤土濁中~2mm右	輪削底内ハ・外縁外に赤土赤黄粉・赤土濁中~1mm	古墳前期	東海系
64 N 2	SK36-2	土師器	壺	口縁部2/3	15.2	—	62.9	120.30	赤土赤黄粉・赤土濁中~1mm	ハ・外縁部ノズリ	古墳前期	東海系
65 S 2	SK22	土師器	壺	胴部	—	—	—	198.10	赤土赤黄粉	輪削底内ハ・外縁外に赤土赤黄粉・赤土濁中~0.5~3		
66 S 2	SK23下層SK22	土師器	壺	1/2	17.8	—	119.9	656.00	赤土赤黄粉中~1mm	輪削底内ハ・外縁外に赤土赤黄粉・赤土濁中~1	現代式(27・34C)後~5C前	東海系
67 S 2	SK30	土師器	小片	1/2	8.2	5.8	1.7	31.00	灰白	口口風形陶器片		
68 S 2	SK30	土師器	小片	—	—	—	—	108	灰白	口口風形陶器片		
69 S 2	SK30	土師器	小片	—	—	—	—	30.84	灰白	口口風形陶器片		
70 S 2	SK30	土師器	中器	底部の2/14	—	8.8	33.0	97.40	白色針状物質混入	口口風形		
71 N 2	P7	土師器	杯	底部の2/3	—	5.3	—	46.4	赤土赤黄粉~1mm	口口風形陶器片	百土原1~大塚大計4.13C前~14C後~	東海系
72 S 2	P14	土師器	杯	底部の3/4	—	4.9	13.0	31.6	赤土赤黄粉~3mm	口口風形陶器片	14C代	東海系
73 S 1	検出	黒土器	杯	底部の2/1/2	—	7.6	2.3	38.2	赤土赤黄粉中~1.5mm右	口口風形陶器片	現代式(19~10)9C後~10C中	東海系
74 N 2	検出	土師器	高杯	1/4	14.8	—	7.0	107.0	赤土赤黄粉0.5~2mm	ハ・外縁ノズリ	古墳前期	赤井土師器内外黒泥
75 N 2	検出	土師器	篋	口縁部2/5	14.8	—	7.1	92.30	赤土赤黄粉中~1mm	輪削底内ハ・外縁外に赤土赤黄粉・赤土濁中~1	古墳前期	年代は最大法量から
76 S 2	検出	須弥器	壺	胴~胴上1/3	—	—	—	17.2	黄褐色	最大径に穿孔・穴		二口口
77 S 2	検出	土師器	壺	—	—	—	—	21.97	赤土赤黄粉	ハ・外縁ノズリ	古墳前期	二口口
78 S 2	検出	土師器	杯	1/3	13.6	6.2	3.45	62.3	内径外縁外明	口口風形内径ミガキ・外縁部赤切	現代式(19~10)9C後~10C中	二口口
79 S 2	検出	土師器	杯	口縁部1/4	11.0	—	2.6	20.03	赤土赤黄粉	口口風形	現代式(19~10)9C後	二口口
80 S 2	検出	黒土器	杯	1/2	15.4	6.9	3.96	142.2	内径外縁外赤	口口風形内径包埋理・ミガキ再磨削	現代式(19~10)9C末	二口口
81 S 2	検出	黒土器	杯	1/2	13.5	6.2	5.0	110.5	赤土赤黄粉中~2mm	口口風形外縁下部ケズリ・ハラ切	現代式(19~10)9C末	焼成される
82 S 2	東トロンチ	須弥器	杯	底部の2/1/2	—	6.4	1.5	37.6	口口風形中~2mm右	口口風形陶器片	古代	
83 S 2	東トロンチ	須弥器	壺	口縁部1/4	30.0	—	4.0	29.05	口口風形中~1mm右	口口風形陶器片	古代	
84 S 2	東トロンチ	土師器	篋	胴~胴上1/2	32.2	—	7.3	141.4	赤土赤黄粉中~2mm	輪削底内ハ	古代	焼成り

出土器・陶器類観察表(4)

観察項目 No. 区	出土位置	種類	段階	残存率	寸法 (長さ/高さ)	重量 (g)	色調	胎土	技法	年代	備考
85 S 2	東トレンチ	黒色土器	皿	1/4	— 5.6 (2.0)	60.1	内黒外黒灰	石丸厚身~2mm	ロウロ或近内黒灰厚・散粒状ミナ子・層状古代白~8.9C斜 外体部ミナ子・高小底付 化カミナ子・ナ子	推定年代 ~未	
86 S	北壁	土加器	餅付	破断1/2	— (1.4)	135.3	黒	紫石角点微細砂粒	古遺跡前	近現代	近郊各名 窯多の社!
87 S	北壁	磁器	鉢口	1/1	3.9 2.5 3.5	22.0	白	白胎ガラス質	ロウロ	近現代	近郊外黒灰文字「清酒 深多の社」
88 N 2	S82トレンチ	東部器	鉢布	破断小片	—	—	2.10 風	白胎土	ロウロ	近現代	近郊外黒灰文字「千山房 産物不山山水文」
89 S	梯上	磁器	小杯	口縁欠損	8.2 2.9 4.8	108.3	白	白胎ガラス質	紫灰形カ所付細粒欠付	近現代	近郊外黒灰「真王 辰女美 水 白部窓女 別火室」
90 S	梯上	磁器	鉢口	1/1	4.0 2.7 3.5	23.2	白	白胎ガラス質	紫灰形カ所付細粒欠付	近現代	近郊外黒灰「真王 辰女美 水 白部窓女 別火室」
01 S 2	S812覆土	土製品	円盤	1/1	長 3.8 厚 0.7	8.70	内明褐色外赤褐	石製角部微欠~2mm			遺物出土状況
02 S 2	S818覆土	ガラス	玉	1/1	長 0.45 厚 0.42	0.22	淡青色色平透明			古遺	直径1.8mm 気泡球形
03 S 2	S822覆土	ガラス	玉	1/1	長 0.50 厚 0.39	0.15	淡青色色平透明			古遺	直径2mm 気泡球形
04 S 2	S823覆土	石製品	勾玉	1/1	長 0.35 厚 0.33	0.40	緑灰	緑色凝灰岩片	片割付孔		直径0.8~1.5mm
05 N 2	S84覆土	土製品	砥石	1/1	長 1.0 厚 2.4	78.07	灰				直径7~9mm

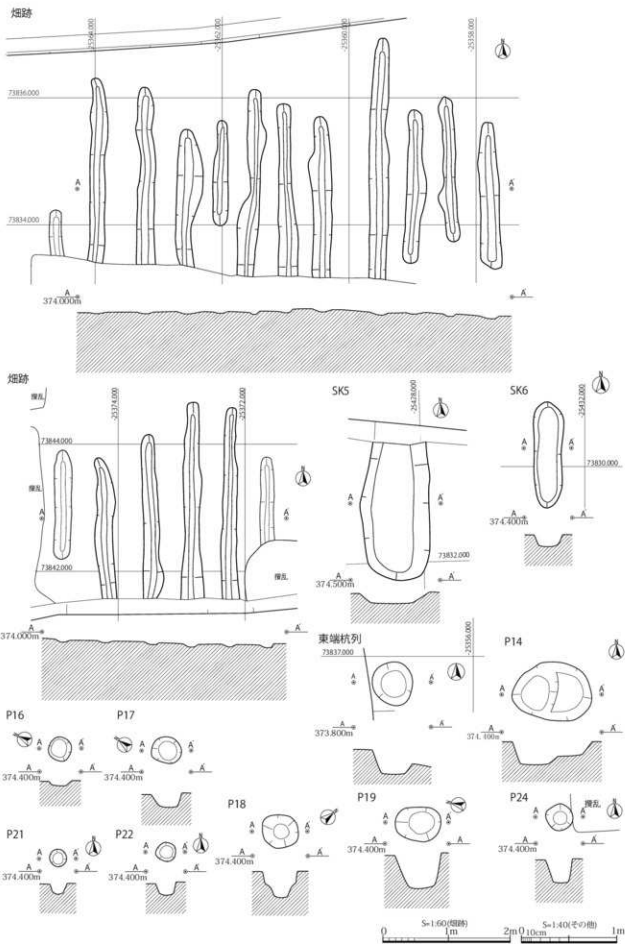
(砥石=赤石炭・石炭質・黒角閃石・黒赤色砂・赤褐色砂・白黒色砂・白黒色砂・黒褐色砂)

区画	出土位置	種類	重量(g)	時期	器種・特徴
S1	堀跡	土師器	99.9	古代	小片
S1	堀跡	須恵器	22.8	古代	瓶口小片
N2	S85	土師器	4.8	古墳	内外赤彩刺鉢
N2	S85	土師器	30.2	古墳	高杯小片
N2	S85	黒色土師	1.3	古墳	小片
N2	S86	赤生土師	2400	古墳	赤彩刺鉢
N2	S86	土師器	1,139.8	古墳	高杯杯蓋
N2	S86	黒色土師	9.5	古墳	小片
S2	S87	赤生土師	31.7	古墳	刺鉢・刺文
S2	S87	土師器	6,130.9	古代	杯蓋
S2	S87	黒色土師	3,381	古代	杯蓋
S2	S87	堀跡	445.17	古代	杯蓋・高台付杯蓋・高杯蓋
S2	S88	土師器	1,789.6	古代	刺鉢
S2	S88	土師器	3.3	古墳	高杯小片
S2	S88	黒色土師	5.9	古墳	高杯小片
S2	S88	須恵器	50.7	古墳	杯蓋小片
S2	S814	赤生土師	67.4	古墳	赤彩刺鉢
S2	S811	土師器	686.9	古墳	刺鉢
S2	S811	黒色土師	1.1	古墳	小片
S2	S811	赤生土師	44.4	古墳	高杯小片
S2	S812	土師器	1,063.9	古墳	高杯杯蓋
S2	S812	赤生土師	202.7	古墳	小片
S2	S812	須恵器	0.4	古墳	赤彩刺鉢
S2	S817	赤生土師	76.1	古墳	赤彩刺鉢
S2	S817	土師器	421.1	古墳	刺鉢小片
S2	S817	須恵器	1,275	古墳	刺鉢
S2	S814	土師器	85.2	古墳	小片
S2	S814	黒色土師	8.2	古墳	小片
S2	S815	土師器	263.4	古墳	刺鉢小片
S2	S815	須恵器	1.3	古墳	刺鉢
S2	S816	土師器	7,076.6	古墳	赤彩刺鉢
S2	S816	赤色土師	22.8	古墳	刺鉢
S2	S816	須恵器	2,58.3	古墳	刺鉢
S2	S82	土師器	3,18.9	古墳	小片
S2	S82	黒色土師	2.0	古墳	小片
S2	S82	須恵器	95.3	古墳	杯蓋・刺鉢・刺鉢小片
S2	S82	土師	64.3	中世	刺鉢
N2	S21	赤生土師	11.9	古墳	刺鉢
N2	S21	土師器	1,265.4	古墳	刺鉢小片
N2	S21	黒色土師	62.7	古墳	刺鉢小片
N2	S21	須恵器	157.9	古墳	刺鉢・刺鉢蓋
N2	S21	瓦	36.3	近代以降	刺鉢
N2	S21	土師器	20.2	古墳	赤彩小片
N2	S23	土師器	629.8	古墳	高台付杯蓋・刺鉢小片
S2	S23	黒色土師	32.2	古墳	刺鉢小片
S2	S23	赤生土師	104.6	古墳	杯蓋小片
S2	S24	土師器	2,330	古墳	刺鉢・刺鉢小片
S2	S24	黒色土師	3.6	古墳	小片
S2	S24	須恵器	17.4	古墳	刺鉢小片
S2	S24	刺鉢	2.4	中世	刺鉢小片
S2	S25	土師器	87.4	古墳	刺鉢小片
S2	S25	黒色土師	2.7	古墳	刺鉢
S2	S25	須恵器	10.7	古墳	刺鉢
S2	S26	土師器	21.7	古墳	刺鉢小片
S2	S27	土師器	22.8	古墳	刺鉢小片
S2	S28	赤生土師	14.5	古墳	刺鉢・刺鉢小片
S2	S28	土師器	238.0	古墳	刺鉢
S2	S28	黒色土師	1.4	古墳	刺鉢小片
S2	S28	須恵器	25.5	古墳	高台付杯蓋
S2	S28	刺鉢	3.2	古墳	刺鉢
N2	SX1	土師器	1,705	古墳	刺鉢・刺鉢小片
N2	SX2	土師器	306.2	古墳	刺鉢・刺鉢小片
N2	SX2	赤色土師	1.2	古墳	刺鉢
N2	SX2	須恵器	19.7	古墳	刺鉢
N2	SX3	赤生土師	52.5	古墳	赤彩刺鉢
N2	SX3	土師器	2,444	古墳	刺鉢
N2	SX4	赤生土師	18.1	古墳	赤彩刺鉢
N2	SX4	土師器	1,983.3	古墳	刺鉢・刺鉢小片
N2	SX4	黒色土師	36.8	古墳	刺鉢
N2	SX4	須恵器	530.2	古墳	刺鉢・刺鉢小片
N2	SX4	瓦	103.1	近代以降	刺鉢
N2	SK1	土師器	108.7	古墳	刺鉢・刺鉢小片
N2	SK2	赤生土師	79.8	古墳	刺鉢・刺鉢小片
N2	SK3	土師器	306.8	赤生土師・古墳期	高杯・刺鉢・刺鉢小片
S2	SK4	土師器	3.2	古墳	小片
S2	SK5	土師器	8.1	古墳	小片
S2	SK6	土師器	23.0	古墳	刺鉢小片
S2	SK7	土師器	30.0	古墳	刺鉢小片
S2	SK8	土師器	313.0	古墳	刺鉢
S2	SK8	黒色土師	2.6	古墳	小片
S2	SK8	須恵器	76.1	古墳	刺鉢小片
S2	SK10	赤生土師	15.4	古墳	刺鉢
S2	SK10	土師器	210.3	古墳	刺鉢
S2	SK11	赤生土師	37.0	古墳	刺鉢
S2	SK11	黒色土師	2.40	古墳	小片
S2	SK12	土師器	57.3	古墳	刺鉢・刺鉢小片
S2	SK13	赤生土師	4.4	古墳	刺鉢
S2	SK13	土師器	113.1	古墳	刺鉢
S2	SK13	須恵器	36.5	古墳	刺鉢
S2	SK13	刺鉢	78.07	中世	刺鉢
S2	SK14	土師器	14.1	古墳	刺鉢小片
S2	SK15	赤生土師	5.1	古墳	刺鉢
S2	SK15	土師器	79.3	古墳	刺鉢
S2	SK15	赤色土師	1.4	古墳	刺鉢
S2	SK15	須恵器	9.2	古墳	刺鉢
S2	SK16	土師器	23.5	古墳	刺鉢
S2	SK16	黒色土師	6.7	古墳	刺鉢
S2	SK16	須恵器	29.5	古墳	刺鉢
S2	SK17	赤生土師	5.0	古墳	刺鉢
S2	SK17	土師器	68.2	古墳	刺鉢・刺鉢小片
S2	SK17	黒色土師	10.7	古墳	刺鉢
S2	SK17	須恵器	12.8	古墳	刺鉢
S2	SK20	土師器	121.5	古墳	刺鉢小片
S2	SK20	須恵器	14.6	古墳	刺鉢
S2	SK20	須恵器	5.8	古墳	刺鉢
S2	SK22	土師器	899.1	古墳	高台付刺鉢
S2	SK22	須恵器	26.8	古墳	刺鉢
S2	SK23	黒色土師	6,902.0	古墳	刺鉢
S2	SK23	須恵器	16.8	古墳	刺鉢
S2	SK23	須恵器	226.2	古墳	刺鉢
S2	SK24	土師器	11.1	古墳	刺鉢
S2	SK24	土師器	11.1	古墳	刺鉢
S2	SK25	赤生土師	10.8	古墳	刺鉢
S2	SK25	土師器	161.9	古墳	刺鉢
S2	SK27	土師器	32.0	古墳	刺鉢
S2	SK28	土師器	320.3	古墳	刺鉢
S2	SK28	須恵器	47.8	古墳	刺鉢
S2	SK29	赤生土師	17.6	古墳	刺鉢
S2	SK29	土師器	148.8	古墳	刺鉢
S2	SK30	土師器	159.9	古墳	刺鉢
S2	SK30	黒色土師	3.0	古墳	刺鉢
S2	SK30	須恵器	328.4	古墳	刺鉢
S2	SK30	土師	96.7	古墳	刺鉢
S2	SK30	須恵器	55.5	中世	刺鉢
S2	SK30	刺鉢	18.9	中世	刺鉢
S2	SK30	刺鉢	25.6	近代以降	刺鉢
N2	P4	土師器	8.5	古墳	刺鉢
N2	P5	土師器	7.3	古墳	刺鉢
N2	P10	土師器	3.0	古墳	刺鉢小片
N2	P12	土師器	11.8	古墳	刺鉢
S1	P14	土師器	2.6	古墳	刺鉢
S1	P17	土師器	6.7	古墳	刺鉢
S1	P19	赤色土師	1.1	古墳	刺鉢
S2	P24	土師器	2.8	古墳	刺鉢
S2	P41	土師器	0.5	古墳	刺鉢
S2	P44	土師器	11.9	古墳	刺鉢
S2	P45	土師器	26.0	古墳	刺鉢
S1	横出	赤生土師	13.0	古墳	刺鉢小片
S1	横出	土師器	1,107.0	古墳	刺鉢
S1	横出	黒色土師	30.0	古墳	刺鉢
S1	横出	須恵器	260.0	古墳	高台付刺鉢
S1	横出	刺鉢	261.0	古墳	刺鉢
N2	横出	赤生土師	14.5	赤生土師	刺鉢
N2	横出	土師器	1,547.4	古墳	高杯・刺鉢・刺鉢小片
N2	横出	黒色土師	77.1	古墳	刺鉢
N2	横出	須恵器	225.6	古墳	刺鉢
N2	横出	陶器	18.7	近代以降	刺鉢
N2	横出	刺鉢	9.7	近代以降	刺鉢
N2	横出	瓦	48.1	近代以降	刺鉢
S2	横出	土師	22.4	古墳	刺鉢
S2	横出	赤生土師	608.7	古墳	刺鉢・刺鉢小片
S2	横出	土師器	15,461.8	古墳	高杯・刺鉢・刺鉢小片
S2	横出	黒色土師	430.6	古墳	刺鉢
S2	横出	須恵器	2,084.8	古墳	刺鉢・刺鉢小片
S2	横出	白磁	2.6	中世	刺鉢
S2	横出	青磁	14.7	中世	刺鉢
S2	横出	陶器	65.1	近代以降	刺鉢
N1	表土	赤生土師	17.4	古墳	内外赤彩刺鉢
N1	表土	土師器	62.6	古墳	刺鉢
S1	トレンチ	土師器	67.7	古墳	高台付刺鉢
S1	トレンチ	須恵器	219.1	古墳	刺鉢
S1	トレンチ	刺鉢	0.7	近代以降	刺鉢小片
S2	トレンチ	赤生土師	17.7	古墳	刺鉢・刺鉢小片
S2	トレンチ	須恵器	2,800.8	古墳	刺鉢
S2	トレンチ	黒色土師	152.6	古墳	刺鉢
S2	トレンチ	須恵器	824.1	古墳	赤彩刺鉢
S2	トレンチ	土師器	40.3	古墳	刺鉢
S2	トレンチ	土師器	1,275.3	古墳	刺鉢
S2	トレンチ	黒色土師	41.1	古墳	刺鉢
S2	トレンチ	赤生土師	207.0	古墳	刺鉢・刺鉢小片
S2	トレンチ	須恵器	3.4	古墳	刺鉢
S2	トレンチ	陶器	53.3	近代以降	刺鉢
N	野	赤生土師	42.2	古墳	刺鉢・刺鉢
N	野	土師器	74.7	古墳	刺鉢
N	野	黒色土師	18.1	古墳	刺鉢
N	野	須恵器	1.0	近代	刺鉢
N	野	赤生土師	14.6	古墳	刺鉢
S	野	土師器	255.4	古墳	刺鉢
S	野	須恵器	2.0	古墳	刺鉢
S	野	赤生土師	69.7	古墳	刺鉢
S	野	土師器	432.0	古墳	刺鉢
S	野	土師器	50.3	古墳	刺鉢
N	野	赤生土師	7.2	古墳	刺鉢
N	野	赤生土師	17.9	古墳	刺鉢
N	野	土師器	154.7	古墳	刺鉢
N	野	須恵器	28.9	古墳	刺鉢

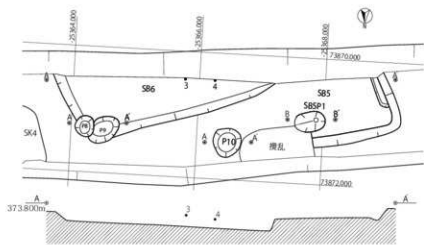
表3 掘外遺物重量表

参 考 文 献

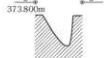
- 愛知県 2007『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世瀬戸系
- 岐阜県 1982『岐阜県史 史料編 古代・中世Ⅱ』
- 斎藤慎一 2014「15世紀の城館」萩原三雄・中井均編『中世城館の考古学』高志書院
- 全国シンポジウム実行委員会 2005『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』
- 全国シンポジウム実行委員会 2005『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』
- 滝沢規朗 2005『新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について』『新潟考古』16
- 武部真木 2006「山茶碗の用途をめぐって－摩擦痕の分析から－」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』7号
- 多治見市教育委員会 2001『北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』
- 栃木県立博物館 1988『栃木県立博物館人文部門取蔵資料目録第2集 歴史1 那須文書』
- (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 1998『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5－長野市内その3－松原遺跡 弥生・総論6』
- (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12－長野市内その10－榎田遺跡本文編Ⅱ』
- (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28－更埴市内その7－更埴条理遺跡・屋代遺跡群－総論編一』
- (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 2011『浅川扇状地遺跡群発掘調査現地説明会資料』
- (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 2014『浅川扇状地遺跡群発掘調査現地説明会資料』
- 長野市教育委員会 1991『小島・柳原遺跡群中候遺跡 浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡 横田遺跡』
長野市の埋蔵文化財第41集
- 長野市教育委員会 1993『本村東沖遺跡』 長野市の埋蔵文化財第50集
- 長野市教育委員会 1998『長野遺跡群西町遺跡』 長野市の埋蔵文化財第87集
- 長野市教育委員会 2006『長野遺跡群善光寺門前町跡』 長野市の埋蔵文化財第115集
- 長野市教育委員会 2008『長野遺跡群善光寺町遺跡・善光寺門前町跡(2)』 長野市の埋蔵文化財第121集
- 長野市教育委員会 2012『浅川扇状地遺跡群榎原宮北遺跡』 長野市の埋蔵文化財第130集
- 長野市教育委員会 2014『福花川扇状地遺跡群御所遺跡(2)』 長野市の埋蔵文化財第137集
- 長野市教育委員会 2016『浅川扇状地遺跡群榎原牧野遺跡』 長野市の埋蔵文化財第143集
- 長野市誌編纂委員会 2000『長野市誌第二巻 歴史編 原始・古代・中世』
- 日本国語大辞典刊行会 1976『日本国語大辞典』小学館
- 野村高広 2013「古墳前期末日本における高杯状装飾器台」『東京大学考古学研究室研究紀要』27号
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 吉井 宏 2001「『要吉』について」『六軒丁中世史研究』第8号
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



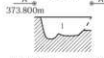
SB5・6, P8~10



SB5P1

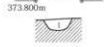


P8・9



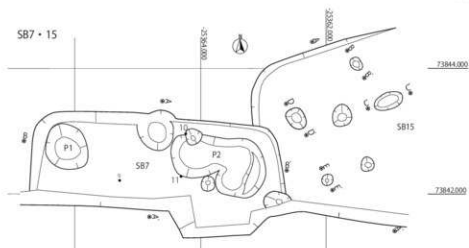
1. 暗褐色粘土。しまりや中弱。炭化物。

P10

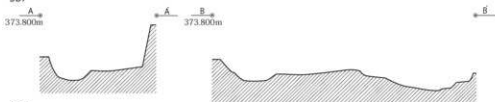


1. 暗褐色粘土。しまりや中弱。

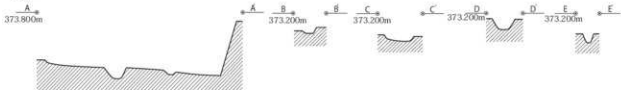
SB7・15

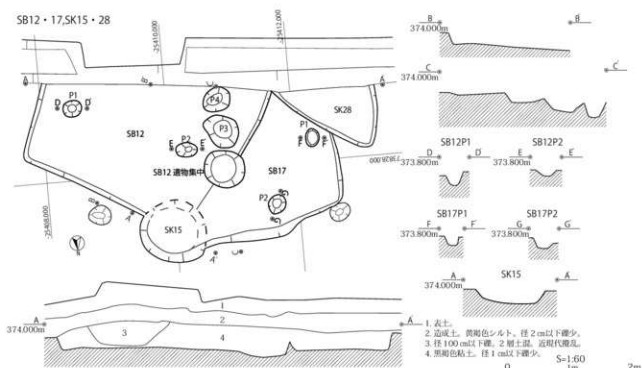


SB7

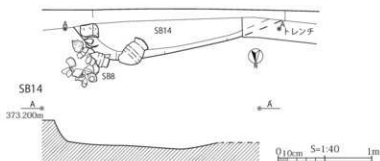


SB15

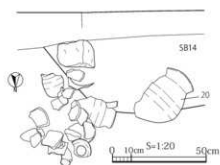




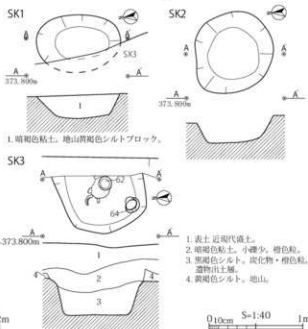
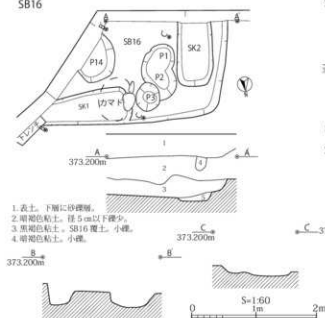
SB8・14



SB8 カマド遺物微細図



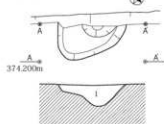
SB16



SK4

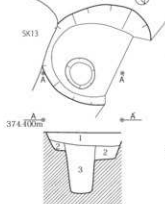


SK9



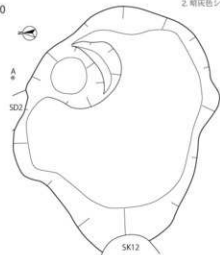
1. 暗褐色粘土

SK14

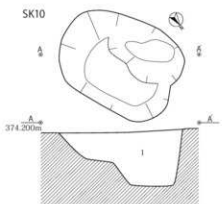


1. 暗褐色粘土。
2. 暗褐色粘土、黄褐色砂。
3. 暗褐色シルト。

SK30

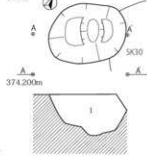


SK10



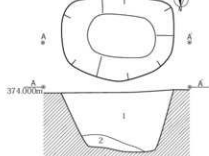
1. 暗褐色粘土。

SK12



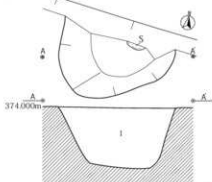
1. 暗褐色粘土

SK16



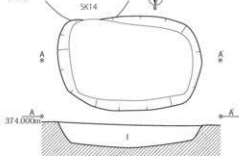
1. 暗褐色粘土、小礫少、橙色粘
2. 黄褐色シルト、しまり弱、炭化物。

SK11



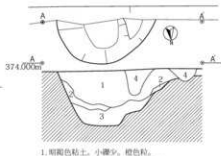
1. 暗褐色粘土、黄褐色砂質シルトブロック・橙色粘・小礫。

SK13

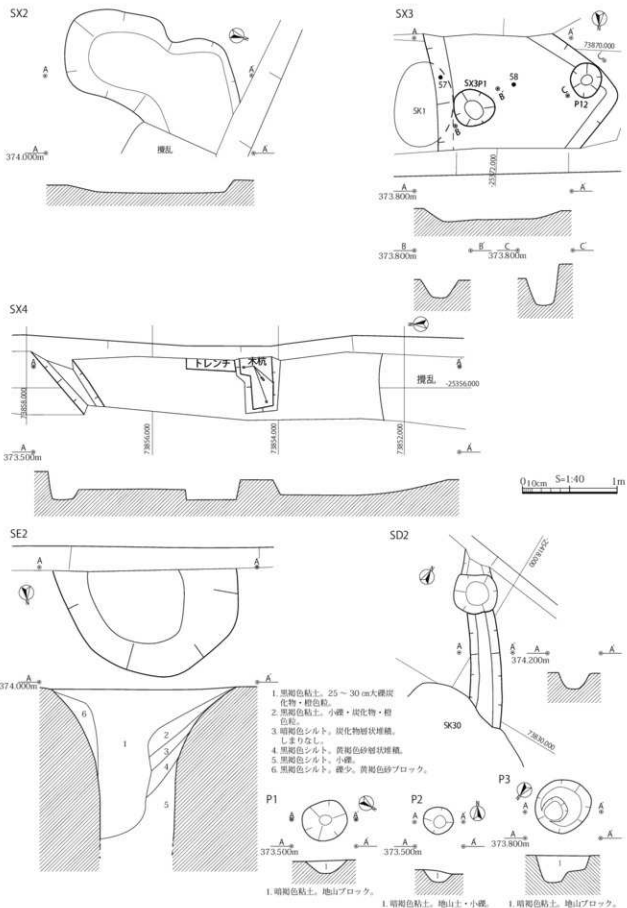


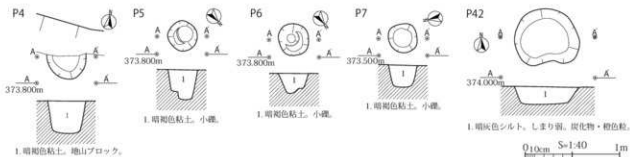
1. 暗褐色粘土、しまりなし、炭化物・橙色粘・小礫。

SK17

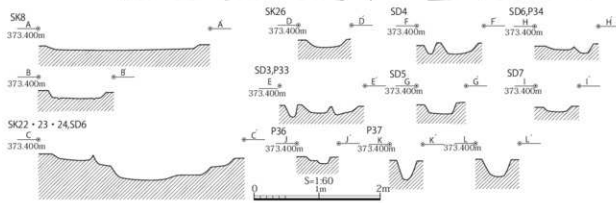
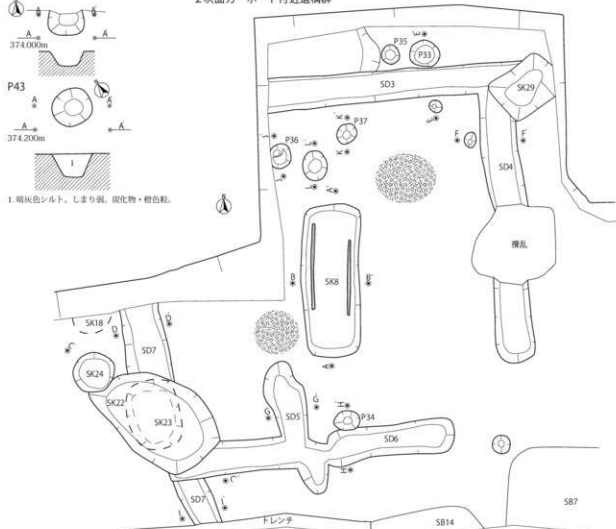


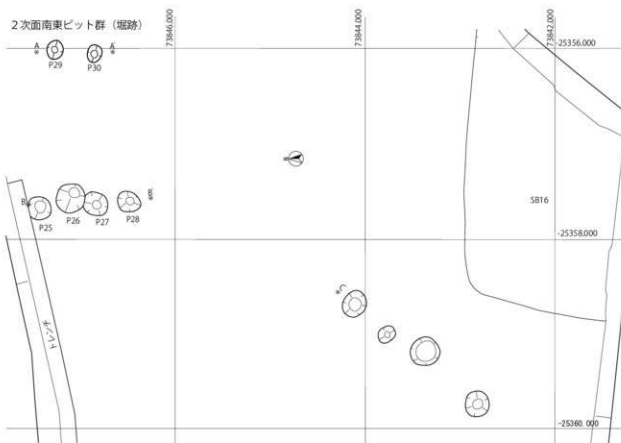
1. 暗褐色粘土、小礫少、橙色粘。
2. 黄褐色砂質シルト、埋没時混入土。
3. 黄褐色シルト、炭化物・橙色粘。
4. 黄褐色シルト、径 15 cm以下礫多。



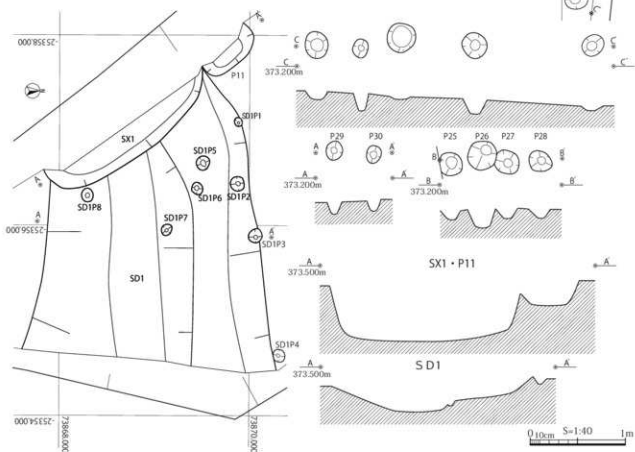


2次面カーポート付近近遺構群





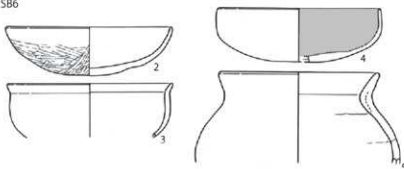
SD1・SX1・P11



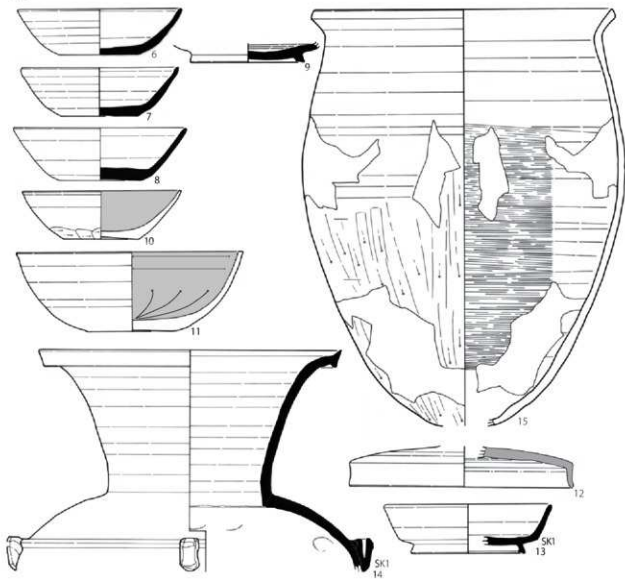
SB5



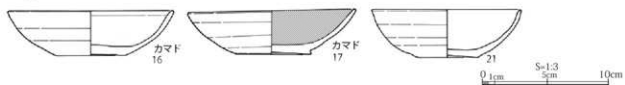
SB6



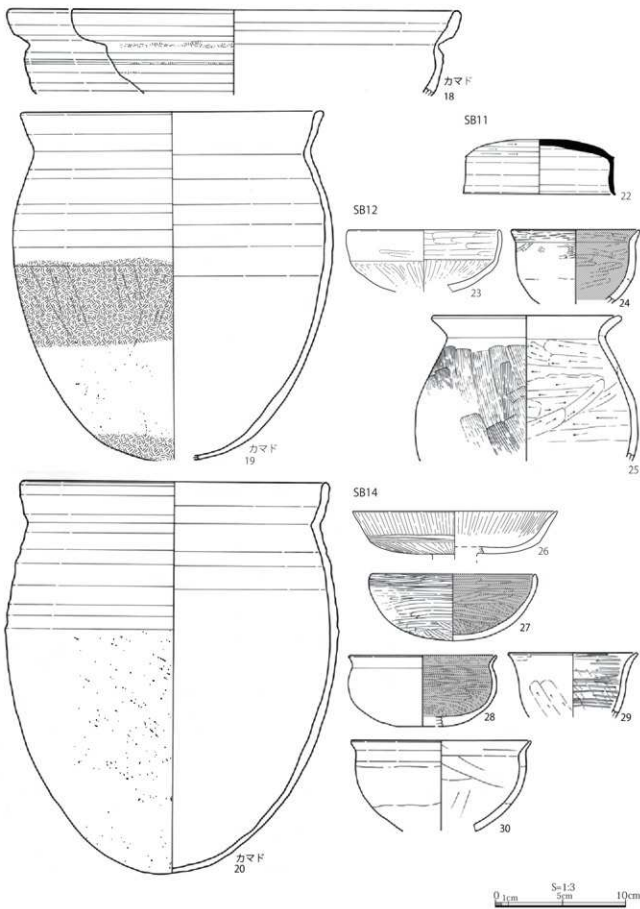
SB7



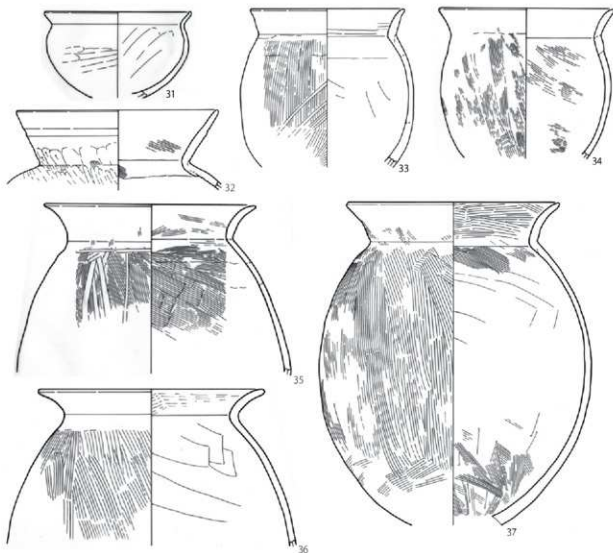
SB8(1)



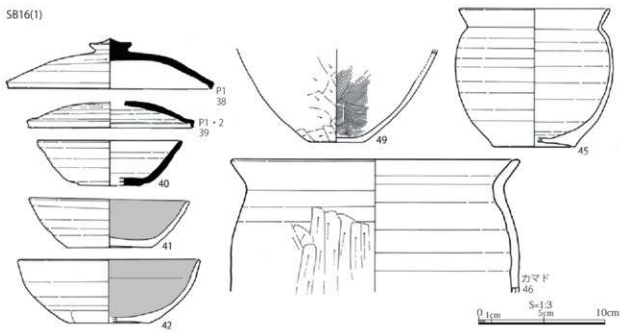
SB8(2)



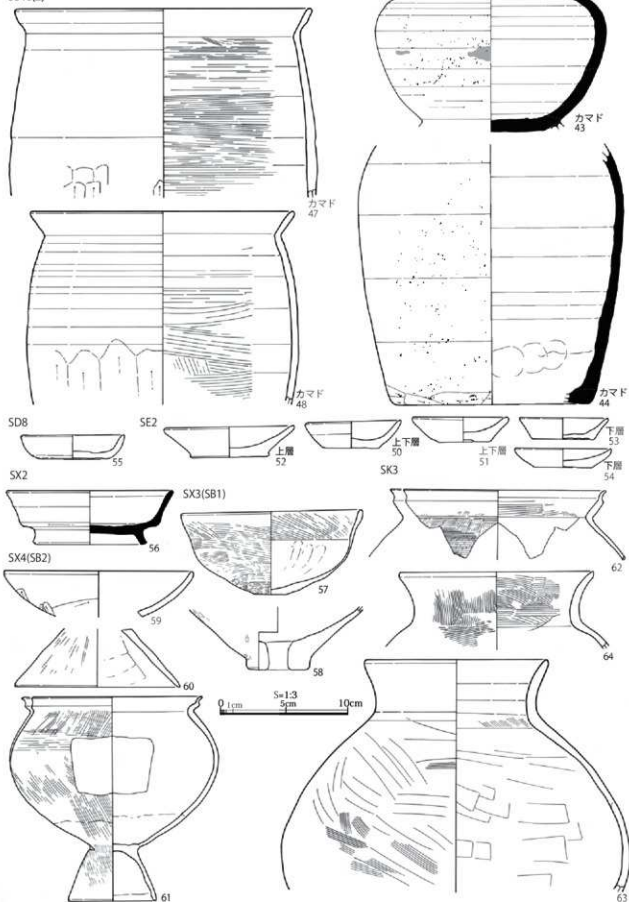
SB15



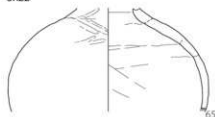
SB16(1)



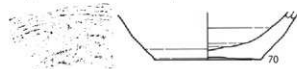
SB16(2)



SK22



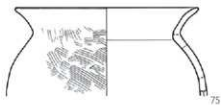
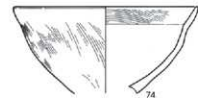
SK30



S区1次検出面



N区2次検出面



SB6



SB12



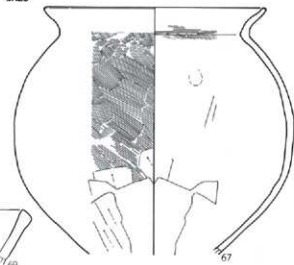
SK18



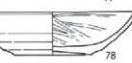
SK23



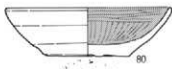
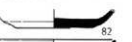
SK23



S区2次検出面



S区2次検出面東Sトレンチ



S区2次検出面東6トレンチ



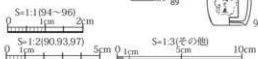
SB2トレンチ



S区北壁トレンチ



S区排土





S区東1次面畑跡（東から）



S区西1次面全景（西から）



N区2次面全景（西から）



N区2次面全景（北から）



S区2次面全景



S区東2次面全景



S区西2次面全景



7号住居全景（北から）



8号住居カマド遺物出土状況（北から）



12号住居遺物集中出土状況（南から）



15号住居遺物出土状況（北から）



16号住居遺物出土状況



3号土坑遺物出土状況(西から)



23号土坑遺物出土状況(東から)



30号土坑遺物出土状況(南から)



4号不明遺構全景(南から)



1号溝全景(北から)

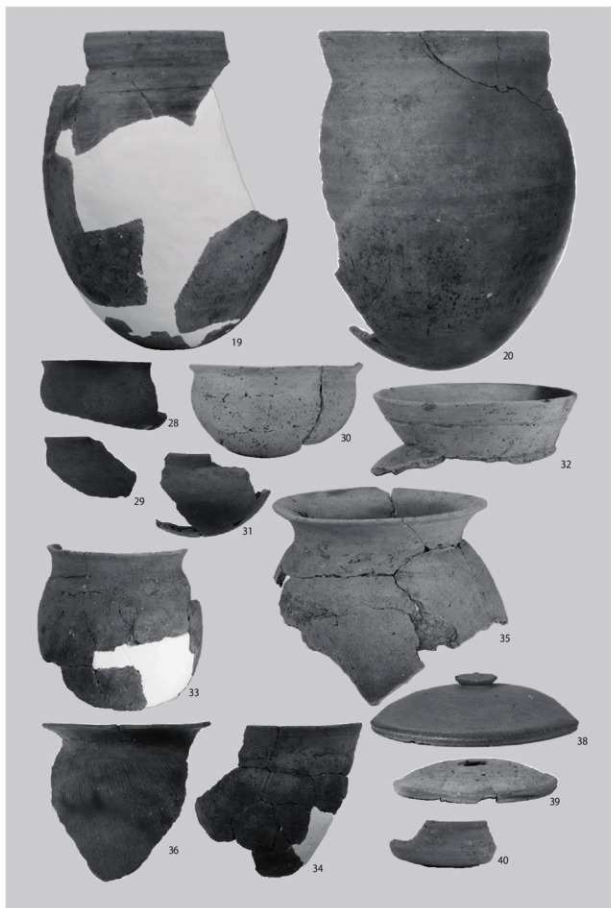


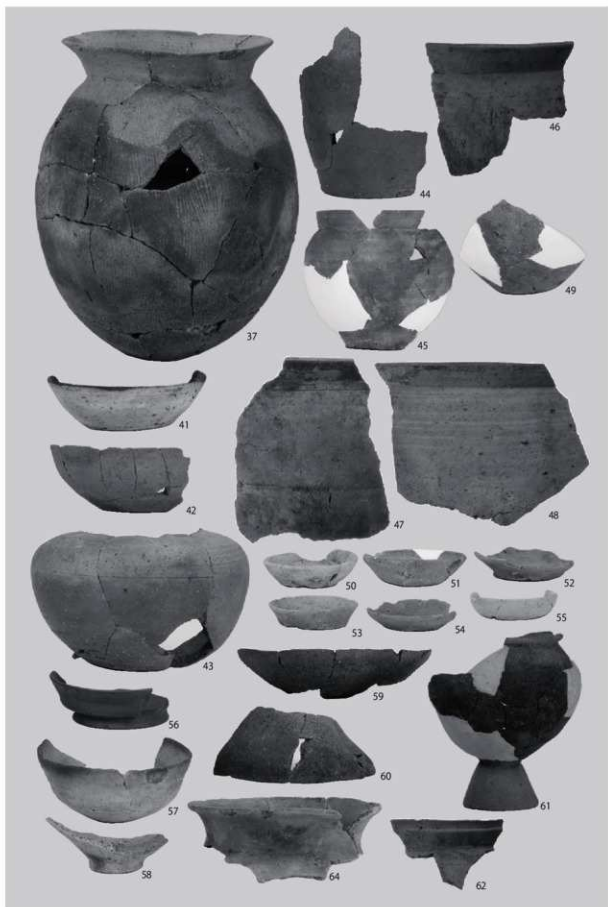
8号溝土層断面(北から)

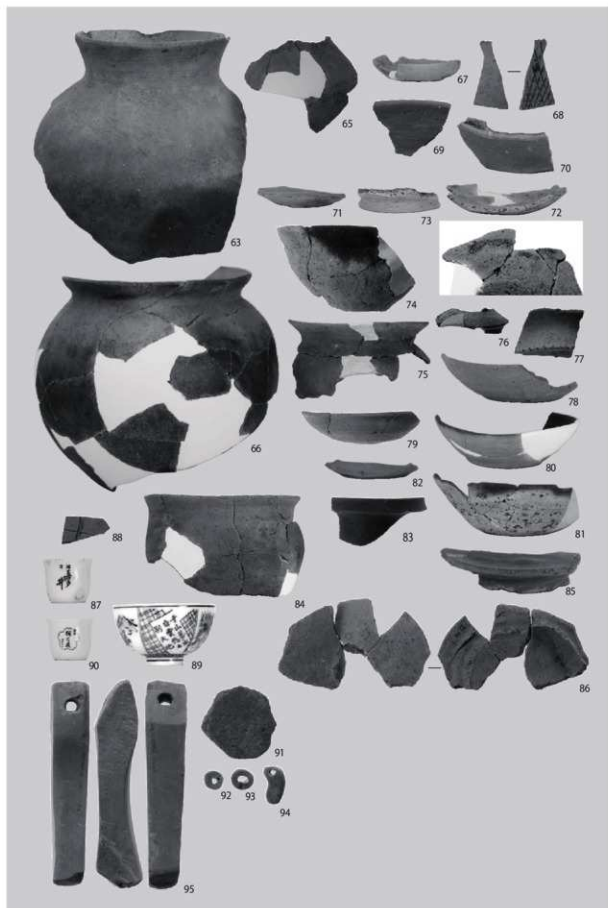


2号井戸土層断面(北から)









ふりがな	きりほらまきのいせき(2)・きりほらまうがい(たかのしやかたあと)
書名	桐原牧野遺跡(2)・桐原要害(高野氏館跡)
副書名	桐原二丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第145集
編著者名	飯島哲也 田中暁穂 鈴木時夫
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL026-284-0004・FAX026-284-0106
発行年月日	2016(平成28)年12月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
桐原牧野遺跡	長野市桐原二丁目 940番地4外	20201	A-501	36° 39'	138° 12'	20150406 ～	603㎡	宅地造成
桐原要害 (高野氏館跡)		20201	A-212	54°	57°	20150602		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
桐原牧野遺跡	集落	古墳前期	不明遺構・土坑	土師器・須恵器・灰輪 陶器・墨書土器・土製 円盤・ガラス小玉・石 製勾玉・硯石		古墳時代から中世 まで、集落が断続 的に営まれる。古 墳時代各期は東海 系・北陸系の影響 を受ける、S字口 録費や結合器台が 見られる。		
		古墳中後期	竪穴住居跡・不明遺構					
		平安時代	竪穴住居跡・ピット					
桐原要害 (高野氏館跡)		中世 中世以降	井戸跡・溝跡・土坑・小穴 畑跡	珠洲焼・東濃型山茶碗 ・土器皿 近現代磁器				

長野市の埋蔵文化財第 145 集

浅川扇状地遺跡群

桐原牧野遺跡 (2)・桐原要害 (高野氏館跡)

—桐原二丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 28 年 12 月 22 日 印刷

平成 28 年 12 月 27 日 発行

発行 長野市教育委員会

編集 文化財課埋蔵文化財センター

印刷 大日本法令印刷株式会社